

それでは、前置きが長くなりましたが、いよいよ解説に入っていきます。まずは左の⑬行から。



⑬のなかには、宛先の「御と様あてさま（久光のこと）江上えたてまつ」の文字が読めます。

このうち「御」という字は、古文書では頻繁ひんぱんに使われる字で、この手紙の中でも一三ヶ所も登場します。どの字が「御」か、見つけられますか。実は①②③④⑤⑧⑨⑪行の先頭はいずれも「御」です。こうして見るといろいろな「御」の形があることがわかりますね（残りの4つの「御」は後ほど）。「と」は「止」をくずした **と** です。読む「かな」は他に「登」をくずした **と** などがあります。「江」は芸能人のサイン

色紙などに「○○さん江」とあるのと同じです。「上り」は「奉り」と同じ読みで、「さしあげます」ぐらいの意味でしょうか。また□には「人々御申上」と書かれています。このような宛名に添えられる語句を「脇付わきづけ」といいます。「脇付」は手紙の差出人さしだしと宛先となる人との関係でいろいろなルールがありますが、今回は説明を省略します。この「御」の字は「御と様」の「御」よりもかなり簡略化されていますが、このような形の「御」もよく使われます。なお、「申上」は⑤行にも **り** とあり、⑨行にも **り** とあります。最後に、□には、この手紙を書いた「なる」の名前が「かな」で書かれています。それぞれどの漢字をくずした「かな」か、考えてみましょう。「な」の字は其の二の「おさかなづくし」でも取り上げた「奈 **な**」を簡略化したものです。「る」は「留 **とどめ**」の字が元になっています。

今回は、ここまで。次回はいよいよ本文を読んでみましょう。